



第118回日本皮膚科学会総会

モーニングセミナー8

自己免疫水疱症に対する IVIIG療法の意義

2019年

6/8_土

8:00～9:00

名古屋国際会議場

2号館 2F 会議室224

第10会場



久留米大学医学部 皮膚科学講座

主任教授

名嘉真 武国 先生

水疱性類天疱瘡における
大量ガンマグロブリン療法的作用

天疱瘡治療におけるIVIIG
これまでとこれから



北海道大学大学院医学研究院
皮膚科学教室

診療講師

岩田 浩明 先生



慶應義塾大学医学部
皮膚科学教室

専任講師

山上 淳 先生

自己免疫水疱症に対する IVIg療法の意義

水疱性類天疱瘡における大量ガンマグロブリン療法の作用

岩田 浩明 先生

北海道大学大学院医学研究院 皮膚科学教室

大量ガンマグロブリン療法 (IVIg) は比較的安全に施行できる治療法で、免疫不全や重症感染症のみならず自己免疫疾患や重症薬疹など皮膚疾患にも使用される。多岐にわたる作用機序は抗体の構造から、抗原特異的な可変領域の作用・抗原非特異的な定常領域の作用に大別される。一般的に抗体依存性の自己免疫疾患におけるIVIg療法の作用機序として、定常領域の関与する機序の一つに Neonatal Fc receptor (FcRn) が関与する自己抗体の分解促進効果がある。また可変領域が関与する機序の一つに抗イディオタイプ抗体による病原抗体の中和作用がある。IVIg製剤には、水疱性類天疱瘡の病原抗体に対する抗イディオタイプ抗体が少量含まれているため病原抗体を中和する作用がある。上記以外にも水疱性類天疱瘡におけるIVIg療法の有効性の報告があるため、最新の研究結果を含めて述べる。

天疱瘡治療におけるIVIg これまでとこれから

山上 淳 先生

慶應義塾大学医学部 皮膚科学教室

免疫抑制療法が主体となる天疱瘡の治療において、免疫グロブリン大量療法 (IVIg) は、きわめて独特かつ重要な役割を果たしてきた。診療ガイドラインに示される天疱瘡治療の目標は「寛解」、つまり少量のステロイド内服 (プレドニゾロン換算で10mg/日以下) 単独または必要最小限の免疫抑制薬の併用のみにより皮膚・粘膜症状を認めない状態を維持することである。これまで、初期治療が不十分だった場合の追加治療として (治療導入期)、再燃のリスクが高い症例におけるステロイド減量の補助療法として (治療維持期)、IVIgが使用されてきた。一方、国内でもステロイド治療抵抗性の天疱瘡に対するリツキシマブ (抗CD20抗体療法) の医師主導治験が行われ、将来的に天疱瘡の治療戦略が大きく変わることが予想される。これまで当科で行われたIVIgについて総括するとともに、これからの天疱瘡治療におけるIVIgの位置づけを考える。